

美濃国不破郡赤坂宿における助郷役について

著者	中村 ？
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	16
ページ	92-97
発行年	1964-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/11117

美濃国不破郡赤坂宿における助郷役について

中 村 畠

一 赤坂宿の助郷制

助郷とは、宿駅の機能を助ける為の伝馬や役夫を出す事を義務づけられた宿駅附近の村落の事を言うのであるが、最初の頃は、定助郷と加助郷の二種があり、定助郷とは定置の助郷の事で、宿駅近在（一、二里程度）の諸村落が大体それに当てられ、其の割合は高百石に付、馬二匹、人足二人、であった。

それに対して加助郷は、臨時の大通行に供える助郷の事で、宿場より五里以上十里まで位の範囲の諸村に課したものである。割合は定助郷と同じであった。これが後には両者共定助郷にされ、課する人馬の数も増えた。街道の往来が増大した為である。

さて、美濃国駅通助郷の制が定められたのは寛永十七年の事で、岡田将監手代濃州郡奉行鈴木半右エ門・村瀬彦左エ門によって命令された。

一、赤坂宿助郷 高屯万三百拾九石五合

右之村々

池尻村・昼飯村・矢道村・荒尾村・興福寺村・末守村・南方村・北方村・更屋敷村・青墓村・榎戸村（他領）・片山村・（他領）・草道嶋村（他領）・市橋村（他領）
 メ拾五ヶ村 定助

元禄七年二月改正の赤坂宿助郷次記の通り
 一、高一万二千四百四拾屯石 大助拾八ヶ村

濃州不破郡

高八百十五石 荒尾村 高二百四十三石 榎戸村、高六百三

十六石 昼飯村

高千六百四十五石 福田村 松木村

同国安八郡

高四百八十三石 興福地村

々六百五十九石 南方村

々四百九 石 中 村

々千九百十八石 北方村

々四百四 石 笠木村

〃五百六 石 中野 村
 〃千二百 石 池尻 村
 〃四百四十 石 草道島村
 〃百九十四 石 和泉 村
 〃三百六十六 石 更屋敷村
 〃四百五十一 石 河間 村
 〃四百四十二 石 八条 村
 〃七百七 石 加納 村

同国池田郡

高九百二十四石 市橋 村

右之通赤坂之助郷申付候間、相触次第人馬無滞村々より可_レ出_レ之勿論、此帳は赤坂町に差置、助郷之村々にては写致置、自今後急度可_二相守_一、若費之人馬触仕候敷、助郷より於_二不參仕_一は、曲事可_二申付_一者也。

元禄七年戌二年

諸(星) 伝左エ門_御
 萩(原) 彦次郎_御
 井(戸) 三十郎_御
 稲(生) 伊賀守_御
 松(平) 美濃守_御
 高(木) 伊勢守_御
 赤坂町問屋・年寄
 右助郷之村々名主、百姓

(赤坂町史による)

美濃国不破郡赤坂宿における助郷役について(中村)

ところで助郷制は、それを課された村々にとっては大変な負担であった。特に農繁期などにおいての負担は想像以上の苦しみであったと思われる。しかるに宿場の方ではこの制度を出来る限り使用して宿自体の負担の軽減を企図したらしく、又、その為の支払費用についての不正などもしばしば行われたようで、従って宿場と助郷諸村の間においてこれらに關する問題が起つた事は察するに難くない事である。その事について次に若干ふれてみる。

二 宿、助郷間の問題

前の章に述べた助郷諸村は、赤坂宿の宿場としての機能を十全に發揮させるための外部機構としての役割を負わされたのであるが、既述の如く、宿場のほうの助郷各村に対する負担のしわ寄せが著しいため、両者の間に問題が絶えなかった。次の一、二の資料はその事を裏付けている。

『天保十四年差出申規定書付之事』

今般御公儀様御廻宿に付、宿郷人馬勤方御糺奉_レ請候節、大御通行之例、人馬触当高多、其外の儀、村々より御申立破_レ成候処、御糺之上、御利解之趣相弁候に付、後年に至る迄、忘却為_レ無_レ之、逸々左に一点書認め差入置申候。

一、年分廉立_{せむ}と大御通行之節は右御印鑑御先触写及_二披露_一、人馬員数御評儀之上、其御村々之触出可_レ申候事。

一、年内助郷人馬触之節は御通帳に相仕立、登り方下り方遣払並村出宿雇不用揚返し等の訳審に相認め、世話役之者相渡可_レ申候事。

一、不用揚返し人馬出来之節は、何之訳にて不用に相成候段、其時々御村之人馬通帳に相記、差出可_レ申候。

尤雇人馬之分不用に相成候儀は此度改て雇の人数並雇出村出人馬同様、宥板帳に差加へ、雇人馬より遣払候様可_二申付_一候事。

一、請負出越預所等之儀は其年限に差引致し代銀を以て致_二勘定_一候様、請負之者へ申付可_レ致_二明細_一は勿論、五十人又は百人余の出越等は御村々にて御不審相立候儀に付早々村々之急觸を以触当可_レ申事。

一、大御通行之節、立物其外小使・本陣・手伝・聞次・御茶屋水汲人馬札紙替り等御伝馬に抱り候筋無_レ之に付、向後相止め可_レ申候事。

一、諸家様御雇揚賃錢等は御立会之上亭人半払、式人払等の訳問屋庭帳を以て明細相認勘定仕立一ヶ年限割合致し御渡可_レ申事。

一、助郷人馬触当候はと遅参不參無_レ之様、御差出可_レ被_レ成候事。

一、助郷惣代問屋場へ立会之儀他領六ヶ村上り出人馬有_レ之日は早朝より御立会可_レ被_レ成候事。

但大御通行にて人馬多分触当の節は前日又は前々日より御立会可_レ被_レ成候事。

一、赤坂宿立人馬五十人五十疋可_二相動_一之処先年為_二取替_一に書付之趣意にて、是迄二十五人二十五疋に仕来り、日々帳之も其旨相認め候段、熟談仕置候処、宿方に所持仕候書付と助郷方に有_レ之書面と趣意齟齬仕候に付、今般改て日々開其二十五人二十五疋是迄の通立払其余は助郷より余荷候管取究可_レ申候事
右ヶ条の通御公使様えも御請申上致_二規定_一候上は後年に至迄

少も違犯致まじく候依_レ之宿役人連印を以て差入置申候処如件
天保十四卯年五月十五日

赤坂宿問屋見習 義 八

問屋 広 助

同断 亦 一

問屋 兼 嘉 六

年寄

同断 半左衛門

福田村

桧 村

笠毛村

榎戸村

草道島村

北方村

右村々御庄屋衆中

右の通御取究申候上は向後前ヶ条の通聯違約致まじく候。依_レ之六ヶ村役人連印致し差入置申候処如件。

戸田采女正御預所

福田村庄屋代 伴 右衛門

桧 村 庄屋 為 右衛門

尾張殿領分

笠毛村庄屋代 助 太 夫

榎戸村 庄屋 若山七郎兵衛

草道島 庄屋 川出文左衛門

松平能登守領分

北方村 庄屋 彦 太 夫
同村分郷庄屋代 喜左衛門

赤坂宿御問屋衆中

これは天保十四年幕府道中役人が赤坂宿へ来て、宿助郷人馬勤方について糾明した時、大通行の折に、宿から助郷への人馬触当高が多いことや、宿の取扱に不当があることを福田村外五ヶ村から申立てた所、すべて聞届けられたので、宿問屋側で宿助郷規定書付を作り、それらの村々へ差出すことになった時のものである。この他にも当時の赤坂宿の人馬遣払いについて不正がある旨の訴えが助郷の村々等から出され、それに対し赤坂宿の方からは「少しの不正な取計らいもしていない」旨の申立てをしてお互いに譲らず、これでは後年のためによくないとの事で弘化四年十二月、政田村高木耕平外六人の取あつかいで、示談が成立、十六ヶ条の内熟規定証文を作成し、宿助郷とりあつかい連署の上、之を取交した。その証文は次の通りである。

『差出内熟規定証文之事』赤坂町役場蔵

天保十二丑年赤坂宿人馬遣い弘之儀に付、去る卯年助郷村々並諸筋村々よりも惣代を以て御訴訟申上、取調仕候に就ては宿助郷共立会人被^ニ仰付^一、被^ニ下置^一候様、奉願上候処、各々立会被^ニ仰付^一、於赤坂宿に追々御取調被^レ下候処、助郷方よりは「人馬不正の遣い弘有之趣」申立、宿方よりは「聊不正の取計い無之」垂井宿日ノ帳より引合せ、明白相成候様調致し度趣、双方理分申張、追々手数相重り候立会被^レ下候得共、正不正の訛など明白相成

美濃国不破郡赤坂宿における助郷役について（中村）

候迄取調居候ては双方気肌相離し、後年に至迄治り方不宜に付、各方より内済取暖にても可^レ被^ニ仰付^一從、御役所へ被^レ仰上候処、亦各方へ内熟取暖被^ニ仰仕^一則御立入の上、宿助郷より正不正の訛など種々申論の儀は今般各方へ御貫請被^レ下、且御馳走人馬並小使入足等の儀、是迄宿方取計い不都合の旨助郷村々より申出、宿方よりは右様の儀無之段申張、彼是行違候得共遁去候儀に付此段も御貫請被^レ下、今般御他領助郷村々へ御領分助郷村々より示談の上、向後平均勘定何れに過不足有^レ之候共、勤返しの儀宿助郷示談の上取計い可申候。然上は双方睦敷御用人馬無^ニ御差支^一繼立可^レ仕様御取暖の趣承知仕候に付、御役所表御同済の上内熟規定相整候趣意左の通。

一、道中從^ニ御奉行^一被^ニ仰出^一候宿助郷へ相拘り候御触書到来の節は相詰候惣代立会可^レ致^ニ披見^一事。

一、宿々立て人馬の儀五拾人五十疋御定法の処從^ニ先前^一赤坂宿の儀は式拾五人式拾五疋日々罔共立弘、其余助郷村々より荷勤可^レ致事。

一、助郷惣代兩人宛日々定助郷の内より問屋場へ相詰め御先触致^ニ到来^一候半ば、御入用の人馬員数宿役人助郷惣代立合取調可申、且右惣代定助郷村役人差有之節は、右式人の内耆人は加助郷の内より出勤致し、耆人は定助郷より罷出相勤可^レ申候。宿人馬立弘助郷へ触当候節は人馬御奉行衆へ御届申上触書差出可申、右御役人衆御出張無^レ之節は追て御届可^レ申候、然上は助郷村々におゐて触当人馬宿差刻限遅参不參無之様取計い可^レ申事。

一、御先触無之監時御繼立の儀宿人馬立払候はゞ詰合惣代のものへ申談、可ニ相成ニ丈余り人馬無之様心を附取計い可レ申事。

一、商人荷物日ノ帳に不十分の儀は、宿人馬遣い払手捆に相成候人馬を以繼送り候様取計い可申事。

一、御先触有之候御通行御延引に相成候儀有は、出水川支等別て聊の制限も争い候儀には、前後宿々聞合可ニ相成ニ丈げ心を附、宿助郷出役の者申談、人馬費に不相成様取計い可レ申事。

一、宿助郷人馬遣い方の儀は御定法の通訖相守可レ申事。

附人馬等遣い方の儀は宿助郷触代示談の上取計い可レ申事。

一、呂久川出水の節、呂久美江寺宿の間水深にて御用物、諸家様共釣荷に相成候節、無益の人馬無之様取計い可レ申事。

一、笠松御役人様御廻村の節人馬繼立の儀御手当も有之儀に付、助郷へ不レ拘繼立可レ申事。

一、大御通行の節、助郷惣代の者人数相増罷出、宿役人へ申談人馬高取調御差支無之様繼立可レ申、且会所錢箱宿助郷共出役の者立合致ニ封印一置、受取候賃錢不残右之箱へ入置、御通行相濟候上立合致ニ開封一夫々可レ致ニ割錢一事。

一、御通行の節、立物其外小使御茶屋水汲等御伝馬に拘り候筋無之に付、向後相止め可レ申候。無抛入用の節は宿助郷示談の上取計い可レ申事。

一、諸家様御雇揚賃錢の儀寄人式分五厘より式人迄御払の分立会の上間屋帳へ明細に相認置、老々年限に勘定可レ致ニ割合一事。

一、助郷方雇人馬の儀問屋へ不ニ相拘一事。

一、御他領助郷村々、御領分助郷村々より人馬平均の儀、惣助郷

筋々より罷出候世話役のもの御他領同様平均に差加へ可レ申事

一、御由緒並隣国の御大名様方御通行の節、御馳走人馬御領分御他領平均方の儀、今般御他領助郷村々へ御領分助郷村々より遂ニ示談一書付被レ置候上は、御馳走人馬の儀御他領助郷人馬の分御雇揚賃錢に可ニ相成ニ様、御領分より相償平均に相立可レ申候、右御馳走人馬並世話役の者平均に相立候儀に付、後年に至り御他領村々より彼は故障申立候共、御領分助郷村々より致ニ引合ニ、聊宿方へ厄介入用等相掛け申間敷候、且弘化四丁未年以前の儀は御他領より如何様申出候共、宿方へ引請、御領分助郷村々へ毛頭難渋懸け申間敷候事。

一、右箇条の外、先前仕来通計い可レ申候、乍然不筋の儀も有之候半ば宿助郷示談の上相改可レ申事。

右の通内済熟談相懸候上は差障申分無ニ御座候。然上は御用人馬繼立方双方睦敷遂ニ示談ニ、後年に至迄前箇条の趣聊違乱為レ無之宿助郷連印証文差出申処仍如件

弘化四丁未年十二月

赤坂宿助郷

屋飯村名主	幸右衛門
河間村名主	小十郎
池尻村名主	与右エ門
笠木村名主	伴次
南方村附名主	丈四郎
北方村附名主	早崎齊三郎
市橋村附名主	三内
同村弥方名主	富三郎

赤坂宿加助郷

草道島村名主	左	市	御
八条村名主	市	兵	衛
和泉村名主	儀	左衛門	御
加納村附名主	市	兵	衛
中沢村名主	喜	平	次
興福地村名主	太	平	次
更屋敷村名主	早崎齊三郎	御	
荒尾村名主	庫	十	郎
中野村名主	小川七郎兵衛	御	
右宮筋總代	弥三右エ門	御	
多芸筋惣代	鷺巢村名主	鉄	太
林筋總代	津村名主	市	左エ門
赤坂筋總代	室村名主	所	三郎
柳瀬筋惣代	川西村名主	旧	八郎
今村筋惣代	上笠村名主	佐	兵衛
池田筋惣代	願成寺村名主	仁	三郎
長瀬筋惣代	上秋村名主	台	二
赤坂宿問屋年寄兼	佐	藏	御
同宿 問屋	廣	助	御
同宿 問屋	亦	吉	一
御取喰人 問屋名主兼 門		御	
政田村 高木耕平殿			
長松村 吉田加藏殿			
鷺巢村 田中喜平治殿			

美濃国不破郡赤坂宿における助郷役について（中村）

前書の通拙者共立入、内済和融相整候に付、後年違犯為^レ無^レ之致^ニ奥書調印一双方へ迄通つ相渡置候以上

南屋井村 寺町八三郎殿
乙坂村 御名主六太夫殿
東前村御名主 金郎九殿
丈六道村御名主 三内殿

未十二月

取喰人

政田村 高木耕平
長松村 吉田加藏
鷺巢村 田中喜平治
南屋井村 寺町八三郎
乙坂村名主 六太夫
東前村名主 金郎九
丈六道村名主 三内

さて、以上のような規定書を、しかも何度も宿助郷間において作成しているという事実は一切何を物語っているものであろうか、直接的には、或は表面的には、主として宿場の側に責任があるように観えるけれども、その真の責任の所在は決して宿場にあるのではない事は容易に推察出来る。即ち、既述の如き機構を民衆におしつけ、その機構を自己の意のままに最大限に活用し、しかもその活用に関して要する所の諸負担の殆どを、その機構に組みこまれた民衆にしわよせしていた当時の為政者達、換言すれば各藩の為政者達や、その総支配者として君臨していた徳川幕府の為政者等こそ、その真の責任者達であつたという事が出来よう。